P－68

N 大学看護学科 4 年生のイヤフォン等使用状況と音響性難聴に関する知識の現状

市川佳甫美、宇田優子
新潟医療福祉大学 看護学科

【背景・目的】 近年、スマートフォンや SNS の発展に伴い、音楽やゲーム等を楽しむため、多くの人がイヤフォン等を使用するようになった。本大学でも通学中や講義の休憩中にイヤフォン等を使用する学生を多く目にする。

現在世界の人口の 5%以上（4 億 6,600 万人）が聴覚障害を持っており、世界の若者の 11 億人（12～35 歳の約 50%近く）が携帯型音楽プレーヤーやスマートフォン等による音響性難聴のリスクにさらされている。WHO では、イヤフォン等の使用により、2050 年までに 9 億人を超える人々（10 人に 1 人）が聴覚障害を起こすと推定しており、安全な音響機器を作るための WHO-ITU 規格を発表し、この規格を政府と製造業者が採用していくよう推奨している。このようにして、音響性難聴を予防するための取り組みを WHO が行っている中で、実際にイヤフォン等をよく使用している学生が、音響性難聴の存在や予防することの大切さをどのくらい理解しているのか、といった調査はあまり行われていない。そのため、本研究では、N 大学看護学科 4 年生のイヤフォン等使用状況と音響性難聴に関する知識の現状を明らかにすることを目的とした。

【方法】 2019 年 7 月 20 日に、N 大学看護学科 4 年生 79 名を対象に、集合自記式アンケート調査を実施した。研究の趣旨と、研究への参加は自由意志であることを説明し、アンケート調査票の提出を以って研究に同意したとみなした。調査内容は、対象の基礎情報（性別、年齢、既往歴等）、イヤフォン等の使用状況、音響性難聴に関する知識の 3 項目 19 問。分析は SPSS 22.0、エクセル統計ソフトを用い、χ^2検定、コクラン・アーミテージ検定を行った。

【結果】 77 名から回答を得た(回収率 97.5%)。男性 11 名(14.3%)、女性 66 名(85.7%)であった。

調査結果は表1のとおりである。「音響性難聴について知っている者」は「知らない者」と比較し、「その予防方法について知っている」($p<0.0027$)、「音響性難聴の初期には自覚症状が無いことを知っている」($p<0.0002$)と回答した割合が有意に高かった。さらに、「ノイズキャンセリング機能について知っている者」は、女性より男性が有意に高かった($p<0.0015$)。聴覚に問題を抱えた経験やイヤフォンの長期間使用の有無による、音響性難聴の知識やイヤフォンの使用状況について、有意差は認められなかった。

先行研究より音響性難聴の起こる原因は、音量や聴取時間が非常に大きい場合だと考えられている。そのため、本研究対象者のうち、その原因それぞれにあてはまる者がどのくらいいるのかを視覚化するため、図1を作成した。図1では、本研究対象者のうち、「大音量でイヤフォンを使用した場合」と「音量関係なく長時間イヤフォンを使用した場合」で、その1日使用時間はそれぞれどのくらいを占めているのかを表している。

【考察】 表 1 より、多くの学生が日常的にイヤフォンを使用していると考えられる。そして、聴覚を保護するために気を付けていることが「ない」学生が 84.4%であることから、イヤフォンの不適切な使用等による聴覚への影響を意識していない学生が多いと考察する。また、約半数以上の学生が「音響性難聴とは何か」、「その予防方法とはどのようなものか」を知らないため、それらについて学び、聴覚を保つことに関心を持つことが出来るような機会を設けていく必要があると考える。さらに、74.1%の学生が小中学生の間にイヤフォンを使用し始めていることから、音響性難聴を予防していくための知識の普及・啓発活動を小中学生も対象に行っていくことが必要であると考える。

【結論】 89.6%の学生が日常的にイヤフォンを使用しており、その中でも聴覚を保護するために気を付けていることが「ない」学生が 84.8%、音響性難聴について「知らない」学生が 58.5%、音響性難聴の予防方法を「知らない」学生が 84.4%いた。

表 1 イヤフォン等使用状況と音響性難聴の知識（N=77）

基礎情報		n(%)
性別	男性	11 (14.3)
	女性	66 (85.7)
聴覚的問題を抱えたことがあるか	ある	24 (31.2)
	なし	53 (68.8)
聴覚保護のために気を付けていること	ある	12 (15.6)
	なし	65 (84.4)
イヤフォン等使用状況		
イヤフォンを使用しているか	使用している	69 (89.6)
	過去に使用	4 (5.2)
	使用していない	4 (5.2)
イヤフォンの使用開始年齢	7～12 歳（小学生）	25 (32.5)
	13～15 歳（中学生）	32 (41.6)
	16 歳	15 (19.5)
	20 歳	1 (1.3)
イヤフォンの使用期間	2～9 年間	40 (52.0)
	10～15 年間	33 (42.9)
イヤフォンの使用頻度	毎日	27 (35.1)
	週に数回	39 (50.7)
	月に数回	7 (9.1)
ノイズキャンセリング機能について知っているか	知っている	27 (35.1)
	知らない	46 (59.7)
音響性難聴の知識		
音響性難聴について知っているか	知っている	32 (41.6)
	知らない	45 (58.5)
音響性難聴の予防方法について知っているか	知っている	12 (15.6)
	知らない	65 (84.4)
音響性難聴の初期段階では自覚症状が無いことを知っているか	知っている	12 (15.6)
	知らない	65 (84.4)

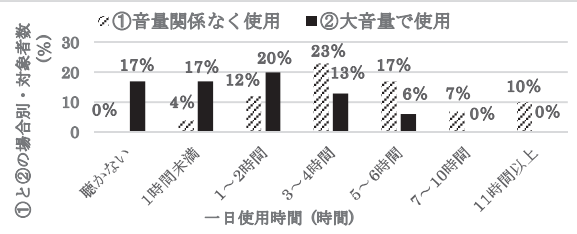

図1 ①と②の場合別・イヤフォンの一日使用時間に占める対象者の割合 (N=73)